



発行所
公益社団法人 国民文化研究会
(九州←東京←全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470
http://www.kokubunken.or.jp/
E-mail: info@kokubunken.or.jp
月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

国家に対する「使命感」、部下に対する「思いやり」

— 葛西敬之先生のご新著を拜読して —

久米秀俊

昨年五月二十五日に逝去された東海旅客鉄道株式会社（JR東海）の葛西敬之^{よしゆき}名誉会長のご新著『日本のリーダー達へ—私の履歴書—』が、この程日本経済新聞出版から刊行された。

先生には、お亡くなりになる僅か半年前の令和三年十一月二十一日に開催された本会の国民文化講座にご出講いただいた。コロナ禍が猛威を振ふ中で、加へて難病の間質性肺炎の末期の、お話をすると呼吸困難となり歩行するだけで息が切れるといふご体調であった。そのために、当初は先生のお身体を気遣ひ、JR東海の秘書室ではオンラインでのご講演を直前まで検討したほどであった。しかし、先生は聴衆の皆さんに直接語り掛けたいと仰って酸素吸入器を装着されて壇上に立たれたのだった。さうしたご体調にも拘らず、中

国の軍事力増強、それに対処する米国などの自由主義諸国の新たな動向、その中でわが日本がなすべきことや守るべきものは何かについて、質疑応答を含めて二時間もお話いただいた。

先生は、昭和六十二年の国鉄分割民営化を実現させた日本を代表する経営者であり実業家である。本書に収載された「私の履歴書」（日経朝刊連載）の中で、「国鉄最後の6年間、私はつねに『討ち死に』を覚悟していた。分割民営化というゴールはあっても、そこにたどり着く道筋はまったく見えない。日々戦略を練り、戦いながら荒野を手探りで進んだ」と述べられてゐる。

国鉄分割民営化は、当時四十万人に上る職員を私鉄並みの二十万人以下に削減して、十六兆円にまで積み重なった借金を政府に背

負ってもらって、新たな借金を増やさない担保として民営化するといふ困難極まるものだった。

また、ジャーナリストの櫻井よしこ氏が本書に寄せた追悼文「二人の国士 安倍総理と葛西敬之会長」には、お亡くなりになるまで、安倍晋三元総理の盟友として、日米関係を基軸とした日本の安全保障のあり方、日本の進むべき道について心を砕かれたことが詳しく紹介されてゐる。

国鉄分割民営化を成し遂げ、安倍元総理の同志として行動された先生の心のよりどころは奈辺にあったのだらうか。本書収載の「あすへの話題」（日経夕刊連載）の中で、先生がお取り上げになった「潜水艇長の遺書」と題された文章に、それを視ふことができた。

明治四十三年、訓練中の潜水艇が沈没して、艇長以下十四人が殉職した。二日後に引き上げられた時、艇長の胸ポケットから遺言をつづった手帳が発見され、「佐久間艇長の遺言」として世界中を感動させたものだが、先生は何十年振りかはそのコピーを読み直されて、「危機に直面した時、人の真価が問われ、行動規範の有無が試される。佐久間大尉の場合、それは国家に対する『使命感』と部下に対する『思いやり』であった。極限の

状況にあつて彼を支えたもの、彼が証明したものは、この規範に対する『無私の姿勢』である」と記された。

旧国鉄の歴代幹部が先送りしてゐた難題に取り組まれたのは、「国家に対する『使命感』」によるものであり、行き届いた配置転換先を職員に手当てしたのは「部下に対する『思いやり』」であつたのだ。また、冒頭に記した国民文化講座へのご登壇もまた、先生の国への『使命感』と若者への『思いやり』のなせる業であつたと思ふ。

この「潜水艇長の遺書」といふ文章の最後に、先生は「平和と繁栄は所与のものと思ひ込み、価値の軸を『損得』と『自己愛』にひっくり返してしまつた最近の風潮では、『無私の心』は『愚かな奴』としか評価されない。『遺言』を読み返しながら、遠くの海に沈んだ人々にも惻隱の情を覚えた」と書かれてゐる。国のために命をささげた先人への畏敬の念、慰霊の思ひを現代人は忘れてはゐないだらうか。日本人としての生き方が正されるお言葉である。

先生は、靖国神社の崇敬者総代でもあられた。国のために尽力された先生のお心を改めてお偲びして、自分の心に蘇らせたいと思ふ。（一般社団法人日本港運協会理事）